

この 23 篇は「詩篇の中の真珠」ともいわれています。神様への信頼を歌った美しい詩篇です。昔から多くの信仰者に慰めと励ましを与えてきた詩篇です。この詩篇が、救い主の苦難のうたと言われる詩篇 22 篇の後に置かれているのは意味深いことです。そのことは、救い主のお苦しみがあって後に、私たちにこの安らぎが与えられることを教えているのではないのでしょうか。

——— 人生の終わりの時に気づいた ———

さて、この詩篇の最後 6 節のところに、「主の家」ということばがあります。「私はいつまでも 主の家に住みます。」この言葉から、この詩篇はダビデの晩年の作品であると考えられます。ダビデは自分の生涯を振り返ってこの詩篇を書いたのです。その生涯の最後のところで、彼は死を前にして「主は私の羊飼い」と心から歌っているのです。

そういえばあのヤコブも人生の終わりの時に告白しています。創世記 48：15 b 節「・・・今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神よ。・・・」(47：29 節「イスラエルに死ぬ日が近づいた時・・・」) ヤコブも人生の終わりの時に「主は私の羊飼いであった」と告白したのです。一人の信仰者として、他の誰よりも激しく生きたヤコブとダビデが、その生涯の終わりに心の深い所に今、はっきりと映(うつ)されている主のお姿です。私たち重い彼らの信仰告白としてこの言葉を読むべきであると思います。私たちも自らの死を間近にした時、ヤコブ、ダビデの様に「今まで私の羊飼いであられた神様」と、心から呼びかけたいですね。

ダビデは 1～4 b 節全体で次の様に歌っています。「主が私の羊飼いでいてくださるからからこそ、主は私に必要ないこいをいつも与えてくださいました。主は私がどんなに愚かで弱くても、御名のために私を正しい祝福の道に導いて下さいました。だから死の先の先にまで主によって私のすべては保証されています」。

そうです。彼はいよいよ死を前にして自らの死の現実を思いつつ、初めて鮮明に主を知るのでした。ここに、今改めて、神様の素晴らしさを味わっている、ダビデの姿を見ます。

それにしてもダビデは今日まで神を信じて来たのに実は、彼は神以外のものにも頼って生きてきました。才能、体力、技術、経験、知識、財産、名声、地位、等々……。何と長い間その様な物にも頼り、動かされて来たのです。しかし今、死を前にして彼が「私は主なる神様の羊である」と告白しています。ダビデはこの事実こそ、これこそが私にとって究極の恵みののだと、はっきり悟ることが出来ました。まさに詩篇 23 篇は心砕かれた人の詩(うた)ではないのでしょうか。詩篇 23 篇は、砕かれれば、砕かれるほどに、その素晴らしさがわかってくる歌なのですね。

さて、人間は一見、強そうに見えても羊のように弱いのだ。と聖書は教えています。そう言われると、確かにその通りかも知れません。それにしても、弱いということを学ぶことは大切なことです。

——— 羊は弱い ———

例えば、羊は臆病で、弱い動物です。外から敵に襲われても、全く自らを守る力を持っていません。更に、羊は近視ですので、群れから離れると、すぐに迷子になってしまいます。ですから、彼らには、彼らを守ってくれる、導いてくれる羊飼いが、絶対に必要なのです。

——— 人間も弱い ———

そして、人間も又、同じです。見かけは強そうに見えても、意外と弱くてもろいようです。サタンからの攻撃、罪の誘惑に対しては全く無防衛です。更に目先のことにしか目が届かない私たちは、人生にすぐ迷ってしまう者なのです。これが、神様から離れて、その人生の中で迷子になっている私たち人間の姿なのかもしれません。ですから、私たちも又、私たちの羊飼い（牧者）を必要としているのです。

ですからダビデは歌いました。（1～3 節）

これらのみことばから、主が私たちにとって、どのようなお方なのかがわかります。

1 節、「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。」

第 1 に、主が（神様が）私の牧者になってくださいました。

この世界を造られて、全てを支配しておられるこのお方が、世界中で一番強いお方が、私の全責任者になって下さった。保証人となって下さった。もうこれだけで十分です。すべてが大満足です。

2 節、「主は私を緑の牧場に伏させ いこいのみぎわに伴われます。」

第 2 に、主は、私をいつも良きところへと、導いて下さるお方です。

主は私たちをいつも豊かな所へと、いのちあふれる所へと導かれます。羊飼いは緑の牧場がどこにあるかを知っています。泉の湧き出る所もよく知っています。

しかし実は、羊飼いは羊を養うためには大変な苦勞をしているのです。特にパレスチナ南部ではそこは一面の荒れ地で、牧草はまばらにしかなく、水もほとんどありません。そんなところで羊を飼う羊飼いは余程優れた人でないと牧草地を見つけたり、水のある所に羊を導くことはできません。

同様に私たちの人生も荒れ地で、一寸先もわかりません。でもすぐれた羊飼いである主がおられるならば、このお方が私たちを導いて下さるならば、豊かな生活を営むことができます。でも羊飼いから離れて勝手にひとりで歩き始めると、たちまち人生の荒野に迷い込んで

しまいます。そして、野たれ死です。群れから離れた羊はオオカミ（サタン）から狙い撃ちです。群れから離れてはいけません。

3 節、「主は私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導かれます。」

第 3 に、主はいのちを与えて下さるおかたです。

主は死んだ者をも生き返らせ、永遠のいのちを与え、御国へと導かれる主なのです。

——— 共に歩んでくださる主 ———

さてその結果、私たちは神様からたくさんの勝利の実が与えられました。具体的な勝利の結果が 4～6 節に記されています。しかし、それは決してご利益的なお恵みのことではありません。主を信じていても、私たち死の陰の谷を歩むこともあります。わざわいも来ます。敵に襲われることもあります。生きているのだから当然ですね。

でもその様な時に主は私たちの指導者として歩まれるだけではありません。私たちと一緒にいて共に歩んでくださるのです。またここでの豊かな生活とは、それは物質的な豊かさだけをいうのではなく、むしろ内面的な豊かさを意味しています。繰り返しますが、主を信じていても「死の陰」も「わざわい」も「敵の迫り」もあるでしょう。しかし、それでも主は常に私たちと共にいてくださる主なのです。

（あかし）私も小さい時、夜よく父と手をつないでお寺の近くを歩いた時がありました。お墓の中も歩きました。でもちっとも怖くありませんでした。父が共にいたからです。

——— 「主」ではなく「あなた」 ———

さて、4 節からはダビデは神様を「主」と 3 人称で呼ぶのではなく、ここではより親しく「あなた」と呼びかけています。「あなたが」「あなたの」「あなたは」です。「主」から「あなた」に変わっています。夫婦関係のように、一対一です。夫と妻の関係のようです。このように主はいつも親しく共にいて、深く交わって下さるお方なのです。

そして、どこでも、いつでもこれからも主は私と共にいて下さいます。これにまさる安全はなく、これ以上の祝福はありません。

ですからわたしたちも詩人ダビデの様に、(6 節)「私はいつまでも、主の家に住みましょう。」とうたいましょう。この世だけではなく、永遠にです。

少し前にもお話ししました。一人のおばあさん。教会で詩篇 23 篇の暗記大会に参加しました。指されてしまいました。全部覚えてきたのですが、あがってしまい言葉が出て来ません。口がもごもごするだけです。でも最後におばあちゃん、たった一言「主は私の羊飼い。・・・これで十分です」

会場は大きな拍手に包まれました。